

遍路の白装束と仏前勤行について

内 田 九州男

筆者がイアン・リーダー先生にご意見を聞きたい問題は二つあります。

一つは白装束の問題です。すなわち、昭和28年に伊予鉄バスの第一号遍路バスが走りますが、その時には20人前後の乗客の中で白衣を着ていたのは一人でした。しかし5年後、昭和33年には白衣が揃うようになります。以後、多くの場合遍路の姿と言えば、笈摺であれ白衣であれ、上半身に白装束を纏ったものです。あるいはズボンまでも白にするケースもあります。

もう一つは、「四国遍路と作法の変遷」の問題です、今回はこの問題を中心に発表し、後ほど意見を伺いたいと思います。

筆者はこのプロジェクトを始めた際、八十八か所を知らずに研究を行うわけにはいかないと、妻と2人で番外札所を含めた108か寺を回るツアーに参加しました。その際手に入れたのがこの本（『四国遍路 作法とお経の意味』）です。これは霊山寺内の「百万人に、お遍路を伝える会」が発行しており、同寺内の仏具販売所で入手できます。

筆者が考えている現代の作法とは、この本の中に書かれているものです。内容は省略しますが、仏前勤行、すなわちご本尊前及び大師堂前では次第に従い納経する、ということになっています。問題は、仏説摩訶般若波羅蜜多心経（般若心経）が一番中心に座り、開経偈から回向文までで構成される、いわば仏教としての参詣方法が、いつ出現するのかということです。

私たちに、四国遍路での札所の本尊または弘法大師の前で祈願する際の方法を最初に教えてくれるのは、1687年に発行された真念の『四国辺路道指南』です。ここに「紙札うちやうの事」があり、まさに仏前勤行の方法が記されていることが分かります。

翻字すると、

「紙札うちやうの事

其札所本尊・大師

大神宮・鎮守・惣して日本大小の神祇 ①

天子・將軍・国主・主君・父母・師長・六親・眷属、乃至法界平等利益と打べし ②

常に同行の恩得（*）を感じ宿札茶札用心有べし、

男女ともに光明真言・大師の宝号にて回向し ③

其札所の歌三遍よむなり ④」

（* 恩得＝恩恵→めぐみ）

となります。

これには注をつけていますが、①が祈りの対象（ご利益を授けてくれるもの）、②が①の結果、ご利益を受けるもの、天子から眷属ないし「法界平等」とあり、生きとし生けるもの全てのことです。③は何によって回向（回向＝自分のつんだ功德や善根を、他に回し向け、自他共に救われようとする事、または読経・布施などを行って、死者の死後の安穩をもたらすよう祈ること）するかについてです。「光明真言・大師の宝号」からわかるように、仏教色が表れています。最も驚いたのは、「札所の歌三遍よむなり」です。これは、経ではなく、そこに飾られている、祭られている仏やその寺院の功德を称える御詠歌なのです。これは、現在のように経を唱える、または納経することによって札所の礼拝に代えるということではありません。むしろ非常に素朴なあり方だと思います。

江戸時代の仏前勤行とは、実は神仏習合、すなわち当時の日本人が神と仏に向って祈りを捧げ、神仏から御利益を頂くというものです。これがはっきりと表れているのではないかと考えています。

先日の講演にも登場した中務茂兵衛は明治16年1月に『四国霊場略縁起 道中記大成』を著していますが、この本は彼の四国遍路65回達成を記念して発刊されたそうです。この本に注目したのは、「札打様の事」と書かれている箇所、やはり真念以来の作法が書いてあり、その次に「三帰・三竟・十三仏真言・大師宝号・光明真言・回向文」が、入り込んできます。しかし、一番の核となる般若心経は入っていないことから、ほぼこの段階までは、伝統的な勤行を引き継ぎながら行ったようです。

そして、今日に繋がる方向性が現れるのが、明治35年の『八十八箇所御詠歌 四国道中記』という近代の作法を示した本です。ここには、「紙札打ちやうの事」一中には諸真言・般若心経・十句観音経・懺悔文が入るという形態一があります。十句観音経などは、現在遍路の中では稀に行われる程度で、ほぼ用いられていません。

次の資料（「仏前勤行一覧」）を見ていただきたいと思います。江戸時代は光明真言・大師宝号と御詠歌で仏前勤行を行います。また、奉納文は誰に祈りを納め、御利益をいただくかということが言葉として掲げられています。文化11年（1814）に一度だけ般若心経を入れた勤行が提案されましたが、これはほとんどの遍路に採用されませんでした。そして次に現れるのが明治13年（1880）であり、これは先ほどの1814年に発行されたものを再び出版したものです。そして明治16年、明治25年、明治35年という形で、徐々に現在の仏前勤行の在り方に近づいてきたと考えられます。そして、明治35年（1902）頃から般若心経を核にした仏前勤行の在り方が定着してくるのではないかと考えられます。これが何を意味するかというと、神仏習合であった私たちの信仰が、明治維新により神仏分離一政策的に非常に荒っぽいものですが一となったことです。これは、祈りの対象の中から国家が保護するのは神、すなわち神道であり、仏教は排除するという動きが生まれ、大変な強力な政策として現れました。その中で、遍路あるいは巡礼は危機を迎えます。托鉢行為の禁止や遍路の修行の禁止です。それを行った場合、愛媛県の条例にも布施を出した側も一定の処分をされるなど、上記のような行為を行う側、それに対応した側双方に徹底した禁止が行われていくのです。その中で、恐らく仏教側が対応したのが、般若心経を中心とし、開経偈を含めた経での仏前勤行の再組織だったのではないだろうかと考えています。それが今日では、ある意味では正当な参拝方法として定着したと考えています。

筆者がなぜこの研究を行ったかという、遍路に参加し、般若心経という全く分からない経を、なぜ唱えなくてはならないかという最初の疑問でした。般若心経は音で聞いていても全く分かりません。前述のガイドブックで読んでみても、漢文として読める一部の言葉を除き、全体としてよくわかりません。そういったもので現在の遍路はある意味で組織されていると考えます。

これは現在すでに定着しているため、今後変更は起こらないと思いますが、仏前勤行の今日の遍路が仏に自分の願いを届ける際の、非常に重要なセレモニーになっていると考えられます。ただし、私たちは神仏習合の生活を送っています。家の中に神棚と仏壇があり、子供の通過儀礼においても、神と仏の場面をうまく使い分けながら安心と納得のいく世界を築きあげていきます。しかし、般若心経を中心とした手法には、筆者は違和感とまではいきませんが、ズレが生じているというのが実感です。

このような近代における歴史的变化のひとつがこれだと考えています。もうひとつは前述したモータリゼーションと重なって出現する、白衣を着用し遍路へ行くという変化だと思っています。これが二つ目の巨大な変化となっているのだと考えています。

仏前勤行一覧

| | 奉納文 (口頭) | 開経 偈 | 懺悔 文 | 三帰 | 三竟 | 十善 戒 | 発菩 提真 | 三摩 耶真 | 般若 心経 | 諸真言 | 光明 真言 | 大師宝 号 | 大師 和讃 | 回向 文 | ご詠 歌 | 十句 観音経 | 大金剛 輪 陀羅尼 | 普礼 | 五体 投地 |
|---|-------------|---------|---------|----|----|---------|----------|----------|----------|------------------|----------|-------------|----------|---------|---------|-----------|-----------------|----|----------|
| 江戸・1687年『四国辺 路道指南』 | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | |
| 江戸・1767年『四国偏 礼道指南増補大成』 | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | |
| 江戸・1814年『四国編 路御詠歌道中記全』 | ○ | | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | |
| 年不詳『四国偏礼道案 内』（1814年と一部同 版） | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | |
| 江戸・1815年『四国遍 路道増補大成』 | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | |
| 江戸・1836年『四国遍 路道指南増補大成』 | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | |
| 明治13・1880年 | ○ | | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | |
| 明治16・1883年『四国 霊場略縁起道中記大 成』（中務茂兵衛） | ○ | | | ○ | ○ | | | | | ○(十 三仏真 言) | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | |
| 明治25・1892年 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○(高師 宝号) | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 明治35・1902年 | ○ | | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | |
| 現代・四国遍路-作法 とお経の意味 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○(十 三仏真 言) | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | |